

源三郎面
げんざぶろうめん

一

むかし、両替商を営む鶴屋つるやという旧家があった。源七げんしちはこの旧家の長男として生まれた。幼少の頃より、することなすこと、間が抜けていた。親の源右衛門げんうゑもんは呆れ果て、鶴屋もわしの代で朽ち果てると嘆いた。源七も自分の才の無きは分っていた。一人前の商人あきんどになろうと努力はするのだが、生まれながらの気の弱さと、間の抜けた風貌のため、客商売では足元を見られ一向にうだつが上がらない。ますます陰に閉じこもる。親の源右衛門は「お前のような甲斐性かいしょうなしがわしの子だと思ふとなさけない。茶屋遊びでも何でもしてきなさい」と若い頃の豪遊を話して聞かせ、源七をけしかけるのであるが、当の

本人は「私はとても女遊びなど恐ろしくてできません」と。うつむきながら、ぼそぼそと釈明するばかり。源右衛門はますますじれて、雷を落とすのであった。
大手を振って町なかを闊歩する。源七は、そんな自分の姿を思い描くのであるが、夢のまた夢であった。

二

そんなある日、源七は、父の源右衛門と手代てだいの善造ぜんぞうに連れられ、深川の船問屋に行くことになった。その日は、源右衛門、朝から小言も言わず、にこにこしている。

「おとつあん、今日は何かい事でもあるんですか」と伏目がちに尋ねた。

「お前も知っているだろう、あの深川の船問屋の娘・・・」
といつになく優しい口調で切り出す。

「お輝てると言うのだが、年もお前と釣合がとれる。おとなしくて良い娘だよ。お前、あの娘と所帯をもちなさい」ときっぱりとした口調。

「でも、私は、会った事もないし・・・」
源右衛門にじろりと睨まれると源七は言葉が途切れてしまう。

「今日は深川ふかがわに行くのでお前もついてきなさい。あちらのご両親には話してある。お輝さんも、親が決めたのなら何の不服もないと言っている」

源七には心に決めた娘が居るわけでもなく、自分で探すほどの甲斐性かいしやうも無かったので、ただただ源右衛門に従うしかなかった。

三

「旦那様、深川も、にぎやかになりましたねえ」
「そうだねえ」

「この界限で両替商を始めたらどんなもんで御座いましょう」てだい手代の善造はよく気の回る男で、源右衛門は目をかけていた。商売の話以外はしない男であり、源七とは折り合

いが悪かった。善造と源右衛門が商売の話をして歩くその後を、とんちんかんな顔をしてついていくばかりであった。

鶴屋を出て半時ばかり歩くと深川に着いた。この辺りは茶屋ちややが何軒もあり、花街はなまちとしても知られている。源七はこういう所に来るのは初めてで、茶屋のなかでこまごまと働く娘たちがめずらしくてしようがない。上目使いできよろきよると四方に目を配りながら二人の後をついていくのである。

源七の足は、とつぜん、菊屋きくやという茶屋の前で止まり、一人の女に見入った。粹に着物あでを着こなし、艶あでやかな簪かんざしを刺していた。目鼻はすつきりと整い、どこことなく優しさも漂っている。すると茶屋のなかから、幼さが抜けきれない娘が「お清きよねえさん、旦那さまが、お清はどこだとさわいでます」と呼びに来た。源七は「ああ、お清という名だな」とつぶやき、後ろ姿を見つめていた。

「これ源七、早く来なさい」と源右衛門が声を荒げると、源七は夢から覚めたように振り返った。源右衛門は事の次第を察したらしく「お前にあの女は十年早い。あの女の名はお清だ。深川一と言われている。あの女に酌をしてもらえるようになれば商人あきんどとしても一人前です」。手代てだいの善造は冷ややかに源七を見ていた。

四

それから幾月かが過ぎ、源七とお輝の婚礼話は滞とまることなく進んだ。源七はと言えば、あの日以来お清のことばかり考えていたが、お輝との婚礼は無事にとり行われ、鶴屋の離れに住むことになった。お輝は悪い女房ではなかった。あれやこれやと源七に気を配り、源七をなじるような事は無かった。それどころか。源右衛門が不肖の息子源七に小言を言うと、源七をかばうほどであった。しかし当の源七はお清のことを忘れられ

ず、いつも浮かぬ顔をしていた。お輝は堪りかねて「ねえ、あんた。わたしがそんなに
気に入らないの」と泣きそうな顔をして問うのであった。

「何でもありませんよ」

「だって、あんたはいつも・・・」

「うるさいね」と小さな声で言い放ち、最近やっと少し飲めるようになった酒を飲み
出て行ってしまふ。源七は決してお輝を嫌っているわけではない。それどころか、い
つも済まないと思っているのだが、どうにもお清を忘れられない。源七は道ならぬ恋の病
におかされて、源右衛門とも妻のお輝とも口をきかなくなっていた。

五

そんなある日、源右衛門に命じられ、屋敷の一番奥にある土蔵の整理をすることにな
った。先代以来放っておいた二十畳ぐらいのがつしりした土蔵である。誰も開けたこと
がないと言う。昼間でも中は暗かった。源七、蠟燭ろうそくの灯りあかを頼りに中に入ると、先祖代々

の家具や調度に埃が厚く溜ま^たっている。

しばらくすると、「だんな」と誰かが源七を呼んだ。かすかな声である。生来臆病な源七は、背中にサーツと水が流れた。また、「だんな」と奥の暗闇から声がした。源七は恐る恐る蠟燭をかざして声のする方へと進んだ。すると、いちばん奥の柱に美しい顔立ちの面が掛かっている。その面は、男の源七でも惚れ惚れするほどの出来栄えの面であった。

「だんな、わたしですよ」とその面は源七に話しかける。腰を抜かしそうな源七であったが、何でもない素振りで「何のようだ」と回らぬ口を無理やりに回し、一世一代の勇氣を絞り出して聞き返した。

「あつしは源三郎^{げんざぶろう}というものです。もう百年この方、真つ暗な土蔵で埃をかぶっているんです。」

「だ、だから・・・ どうだと言うんだ」。源三郎と名乗る面が、自分に危害は加えないと感じ、やっと口が回るようになった。臆病な者は、自分に害を加えるかどうかを敏感に覚るものらしい。

「あつしを、土蔵の外の明るい所に出してくれるなら、なんでも望みを叶えてあげやしよう」

源七の望みは一つしかない。それは死ぬほど恋焦がれているお清と懇意になることである。源七は源三郎と名乗る面に、どれほどお清を思っているかを話した。

「わかりやした。あつしの顔をだんなに貸してあげやしよう。源七さん、あつしの顔を付けてごらんなさい。ぴったりくっついて、笑うことも泣くこともできますよ」

「面が取れなくなっちゃうんじゃないだろうね」と源七は不安そうに尋ねるのであるが、内心は嬉しくてたまらない。

「いえ、取りたければいつでも取れます。しかし面を付けている間は源三郎と名乗りなさい」

次の日から、源七は面を付け源三郎と名乗り菊屋に通うようになった。根が小心者であるから、お清に近づくことは出来ない。少ししか飲めぬ酒を口にし、お清を見守るばかりであった。そんな源七も、いつしかお清とも口をきくようになった。

「ねえ若旦那、毎日熱心に通ってくるけれど、だれかお目当ての子でもいるのかい」とお清。源七は「いや」と言うだけで、恥ずかしいやら嬉しいやらで何も言うことができない。

日が立ち、源三郎の目当てが自分であることに気づき二人は次第に打ち解けるようになった。

「源三郎さん。わたしはねえ、越後えちじの百姓の家に生まれたの。口減くちへらしで売られてきたのさ。人は、深川のお清、なんて言って錢を積むけれど、心底わたしを思ってくれる人なんていなかったよ」お清は細い声で独り言のように呟ささやいた。

「私は違う。私は心底お前さんに惚れている。このまま一緒に身を投げてもいい」「ほんとうかい、ほんとうに私を想ってくれるんだね」

源七は何度もうなずいた。お清の頬に涙が伝わった。

七

源七はお清と夢のような日々を過ごしたが、面がとれてしまうのではないか、私の素性を不審に思うのではないかと気がかりでならなかった。

生家の鶴屋へは十日に一週くらいしか帰らなかった。源七は、気の小さい男であったから、女房のお輝のことも気にかかり、すまないと毎日鶴屋の方に手を合わせていた。

そんなある日、お清は「夫婦めおとになりました。借金も、もう少しで終る。おかみさん

は、ああ見えてもいい人でねえ、夫婦めおとになったっていいんだよと言ってくれる」と言う。

源七にとっては願っても無いことである。お清の望みで、花街の女としては珍しいことであるが祝言をあげるようになった。

祝言の日が決まり、お清の嬉しそうな姿が源七の目に入ってくる。しかし源七は不安

でたまらない。お清は何も知らない。わたしはお清も女房のお輝も裏切っている。本当のことを打ち明けたなら、お清は去ってしまうだろう。面を顔から外して源三郎から源七に戻ると、胸が締めつけられるほど痛いのであった。「なあ源三郎よ、私はどうしたらいいのだろう」と問うが、面は何も答えずニヤツと笑うだけであった。その目の光りに源七はぞっとした。

源七とお清との祝言は十日後にせまつていた。お清はますます美しくなり、茶屋では祝言の話でもちきりであった。「いったいどこの若旦那と夫婦めおとになるのかい、顔を拝みたいもんだ」などと旦那衆に冷やかされた。「いやですよ、からかっちゃあ。そうねえ、今評判の錦絵にしきゑの役者に似ている」と嬉しそう。源七は、そんな話をお清から聞かされると、ますますたまらなくなり、飯めしは喉を通らなくなる。

源七は祝言の日が近づくとつれて、やつれ衰え、三日前になると床に就いてしまった。お清がきても床の中で悲しそうに笑いかけるだけ。

明日祝言という日には、息も絶え絶えであった。お清を枕元に呼び寄せ、自分は鶴屋の源七である事、源三郎という不思議な面のことなど、全てを話し自分の裏切りを詫びた。その時、源三郎面は二つに割れ、間の抜けた源七の素顔が現れた。お清は驚いたが、くちびるを震わせ、涙を溜めて「面がわれたって私の気持ちは変わらない」と源七にすがるのであった。源七の目からは涙が流れ、何も言わずに息を引きとったという。